

浄土

1984-11

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受承認雜誌）第三二五号
昭和五十九年十月二十五日印刷 昭和五十九年十一月一日発行

第五十卷

十一月号



昭和60年度版

浄 土 宝 暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和60年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1 部単価 65円 (200部以上 60円)

送料実費 (300部以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

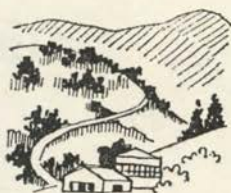
..... お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

十一月号



ただ我れ今その光明を称するのみにあらず。一切の諸仏、声聞、縁覚、もろもろの菩薩衆も、咸く共に歎誉したもうこと亦また是のごとし。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

法話

お十夜を迎える(下)……………遠田弘俊……(2)

浄土宗のハワイ開教(≡)……………新保義道……(25)

〈随想〉

苔むす山寺でのおつとめ……………宮原祐乗……(8)

《世相評談》

仏壇・墓相学のことなど……………高橋良和……(20)

エッセイ

セントルイスの夏(一)……………木下隆一……(12)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第5回……………寺内大吉……(35)
前章・絶唱の経典(五)……………挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一田牛畝選……(18)

表紙 小林治郎画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

お十夜を迎える(下)



遠^{とう}田^だ弘^{こう}俊^{しゅん}

(東京・文京区慈眼院住職)

私達は永い歳月の経過を送る間に、その源の由って来った心を忘れ勝ちになることが多いのです。何事も自分の現在に照して、良きにつけ、悪しきにつけ、勝手気儘に解釈しようとするのがいかに危険なことであるかを知らなければなりません。

いつの時代でもその時代の世相を観て、危機感を訴え、次代を背負う者への期待を訴えるということが、遠い歴史の上に記録されているのであり

ます。この事は人間に与えられた唯一の道だと思えます。人とは自らの行為の失敗を繰り返えし乍ら、その反省の上に次の時代の建設を実現しているものであります。生物の進化とは絶えざる積み重ねから来る進歩の道程でありましょう。だがここで自然的進化和、人間の心の問題を考える時、自然は、その適応の如何に依って、栄えもし、衰えもしているのですが、人間の心は、頭脳的作用に依って、その生存進化の道を歩いているのであ

ります。私達が文明開化という言葉の上にな何を連想することが出来るでしょうか。自然を征服するとか、宇宙の開発とかという語は何から出ていることでありましょう。今更に取り立ててこの語の由来を吟味する程のことでもないでしょうが、既に先人の中には種々論議されていることという人もあるでしょう。

然し私達はどうしても人間として、而も自然の中に生きているものとして、人間の持つ己惚れに對しての制禦を何かの形に於いてしなければ必ず人間の破滅を来す時があると信ずるのです。或いは妄想的な見解と笑う者もあるでしょうが、決して笑いごとではなく、切実に身につまされとことであります。話は飛躍するようですが、この頃の科学者達の中には盛んに、地球の危機感を訴えているようであります。それは決して地球の自然破滅といったような問題ではなくて、総べて人間自身がもたらす自己造罪の破滅に帰することを論じているようです。

殆んどこれは現代の常識のようになっています

から、今更に新しく語ることもないと存じます。然しここで一例を挙げるとするならば、核の問題に致しても、その危険なることは申すまでもなく、その禁止運動が全人類の問題として論じられている反面、万々一の場合には如何にしたならば生き残れるかといったような僥倖的な考えが何処かにあるとすれば、決して正しい論とはいえぬと話した人もあるのですから、人間とは飽くまでも度し難いものでありましょう。

こうして反省の糸口を辿りますと、浮図憶い起す経文があることに気付くわけであります。阿弥陀経の終りに「釈迦牟尼仏よく甚難希有の事を為して、よく娑婆国土の五濁惡世の劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中において、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の為に是の一切世間難信の法を説く」と説いて、「舍利弗まさに知るべし、我れ五濁惡世において此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の為に此の難信の法を説く、是れを甚難とす」と。ここに既に二千五百年以前に説き給うた経として、私達の住む世を

五濁の惡世と決定付けられています。而もこの濁れる世に於いてお覺りの境界を得給うて、阿彌陀仏の眞のおひらきを体得なされ、容易にこの心境を信じさせることが至難の道であると、仰せられているのであります。いうまでもなく、この人の世は、永劫に救い難い、饑饉、疾病、兵難に災いされ邪見妄執の虜となり、互いに勝手氣儘の心に自らを陥入れ、惡逆無道で因果の道理を信ぜず、天寿既に完うせず、道有りても聴聞する心もない有様であります。このことは先般申上げた、五惡段に説かれた心の世界と全く同じ姿であることに気付かせて頂くのであります。

浄土宗の教えとは、飽くまでも自らの内省の上に立って、最後まで自分を掘り下げて、罪惡感に眼覚めることであらうか思ふわけであります。

私達は浄土の三部經を通読させて頂いて、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經と、それぞれの經の説かれている相には、各々の特異の有難さを頂くのであります。どちらの經文にも殆んど一樣に凡夫の境界、殊にこの世（娑婆）の有様の深刻さを

余すところなくお示し下され、何故にかくまでも吾々の心を慘酷に扱わねばならないのだらうと思われる程に表現されているのであります。

無量壽經の後半五惡段、觀無量壽經の前段（韋提希夫人）の懊惱に表現された今世の悲惨さは、正に現代の世相と変ることのない有様ではないでしょうか。かくして自己の罪惡に眼を開いた時初めて大悲の光明を仰ぐことが出来るのであります。申すまでもなく、浄土の教えは「願」の一字に帰入すると説かれています。特に宗祖大師法然上人は、善導大師の觀經の疏から一宗を開顯せられたということは、善導大師の深い自己批判の奥から迸り出た「一心專念」の文に依ることでありましょう。

特に二種の深信と申して、一つには我が身の機根の眞実は何であるかを研め、二つには大悲の本願の深広を知ることと歸するのであります。私達は飽くまでも自己の本来の姿を見つめる時に、仏の實在を信ずるより他に道のないことを憶うわけであります。この度し難い凡夫の私が愈

々最後ぎりぎりの一線に到達した時に得るものは何でありましょう。

さて、お十夜会の本論に入りたいと思いますが、この法要の主旨は報恩の意義を体得することです。報恩とは感恩報謝でありましょう。現代は一言にして恩を忘れた時代だと極論する人もいます。恩と言う字のあることさえ教えぬ教育の在り方に疑問を持つと言った人もありました。こうしたことがあらゆる生活の上に現われて、益々この世が五濁の惡世に陥ち入るばかりであります。しょう。

何故にこうなったか、などと、詮索する以前に各自の心に「恩」の一字を活かして毎日を暮しているであります。平素の対話の中に、「おかげさま、ありがとう」の言葉がどれ程かわわされているでしょうか。個人の権利だけは声を大きくするが、為さねばならぬ義務には一向に無頓着であるといった傾向を憶う時、私は浄土宗である念仏の

教えが、どんなに大切な役割を演ずる教えであるかを痛感せずにはいられないのです。この頃、中国の言葉として有名な語に、「水を飲んで源を思う」或いは「水を飲んだ時、その井戸を掘った人の功を想う」などと言われていますが、特に恩を知って恩に報いることを感じないならば、人としての本性に眼覚めたとはいえないと思います。長々と記して来ましたが、ここにお十夜会の心を述べる為には、どうしても私達の深い反省に立つて初めて、弥陀の誓願の深広なることが覚えることであります。

こうして生活の中に報恩の心が湧くならば必ずしも十日十夜と限ることもないだろうと、嘯なげぶく者もあるかと思えます。宗祖大師のお言葉にも、「ときどき別時の念仏を修して、心をも、身をも、はげまし、ととのへすむべきなり、日々に六万遍七万遍を唱へれば、さても足りぬべきことにあれども、人の心さまはいたく目なれ耳なれぬれば、いらいとする心すくなく、あけくれ忽々として心閑ならぬ様にてのみ、疎略になりゆく

なり」と警告せられているのであります。こうして考えます時、かの平貞国が世の無常を歎いて、出家しようと思ひ出した三日目の夜の夢に、一僧告げて「心だに立てし誓いに適いなば世の営みはとにもかくにも」とあつたことは、弥陀の大慈悲の光の前に、人の世の相は単なる大海の波にも似て、本来の仏の誓いに添うて、行うことこそ大切なのだとの靈示と受け取る可きでありましょう。

結果として貞国は人の世に人として在る可き姿をそのままに保ち乍ら、阿弥陀仏の本願に眼覺めて、念仏生活に入ることが出来たこととなつたわけでありませう。何事も勝手な理由をつけて努めるべき行を怠つて氣盛な生活に陥入ることが最も恐るべき結果となることでありませう。私達の信仰生活でここ今一度深く反省して、遺された行事の中に求めなければならない心を確立したいものであります。

往々にして行事が行事で終る結果が少くないと言われていますが、行事そのものがいかに心のささえとなり、忘れられた心に大きな光となつて蘇

返ることになるかを思う時、自らの欲びとなることを願うわけであります。

現在十夜法要として、その形をとどめている寺院も少くはありませんが、その多くは、往時の殷賑さは薄れて、只何となく、双盤念仏、塔婆供養、諷誦文、等々地方色豊かな法要が名残りを留めているのです。特に十夜の頃は農村収穫の頃でもあります。名月の頃でもあつて、殊のほか農耕民族である昔の日本の各地で、豊かな法要が勤められ、最近まで東京近郊の寺院で青物十夜等といつて、大八車に近郊から野菜を運んで、前日かち講中が泊り込んで、ケンチン汁を振舞つたといふことです。こうした古老の話には、懐しい十夜会の憶い出が込められて、現在の十夜法要の核的地位を保っているように思われるのです。だがこうした形骸のみの法要に終らず、是非念仏の声の盛んなるを願わずにはいられません。

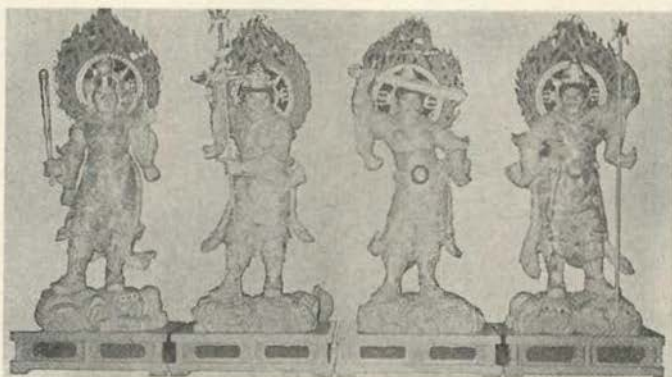
燭切つて高座明るき十夜かな

無量子

木彫像

—四天王像—

。。。格調高い品性豊かな尊像。。。



多聞天
(北)

増上天
(南)

持国天
(東)

広目天
(西)

材質 楠材・檜材

サイズ 総高さ2尺(生地仕上手彫) 4体一組 48万円

サイズ 総高さ3尺(生地仕上手彫) 4体一組 75万円

◎彩色仕上も承ります。

▶ご一報下さればご相談に応じます。

有限会社 承 田

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

(随)

(想)

苔むす山寺でのおつとめ

みや はら ゆう じょう
宮 原 祐 乗

(長野県高森町光尊寺別院住職)



長野県西部地震、九月十四日朝。信州伊那の地も久方ぶりの大地震に苔むした山寺の本堂もみしみしと音をたてて揺れ動き、山脈を越えて王滝村より四十キロメートル余り離れたこの地でも、その揺れに驚きであった。ちょうど『浄土』誌編集子よりのご依頼で、「日々の感想」を書かせて頂いている途中のことであった。

外を見ると百年を超えた松の木が左右に揺れており、王滝村での直下型地震のものすごさの一端を感じたのである。王滝村へ勤めている知人が土石流に流されたとの連絡もあり、仏さまの御力（こういう時は本当に他に頼るすべもないもの）を願って、十五日夜一生懸命家族でお念仏を申させて頂いた。翌十六日、その知人は泥下五メートル程の中より、生こ

ン事務所があった場所から五百メートルも流された地点で見つかったとのこと。仏さまの御力のすごさを心から感じた次等である。テレビや新聞で報道されている以上に現場の土砂のもののすごさは目を覆うものであった。工事にダンプ三台に乗っていた人は、地震で目の前の山が揺れ動き山が覆いかぶさるようになったために、危険を感じダンプより飛び出し逃げて一息ついて後をふりむいたら、既にダンプと友人六名の姿は眼中になく、目前は土砂流が流れていたと、その瞬間の出来事の恐しさを話してくれた。直下型地震のもののすごさをかいま見ると共に、仏さまの御力としかいいようのない故人の発見であり、その故人の夫人もこれから書く写経会の常連の一人であった。

さて大学卒業以来研修を始めた法式の勉強

会も十五年に及んだ。ここにありがたい機会を得て、雑感を含めてその記録としてみた。

昭和四十五年初秋、小熊良悦、押野見孝之、山本尚三、原勇哲、五島要津、原口正弘、神谷高義、森芳秋、蟹和顯馨、堀隆広、岡田守生、大橋寛順、森田孝隆、富田真山師らの諸兄が、京都の浄土宗法儀司(浄土宗法式の最高責任者)宍戸榮雄先生をお願いして、信州の山寺に集まり、「お勤め」の稽古と実践のために、五日間の合宿をしたのにその会は端を発する。講師にお願いして本堂の飾り付け、日常の食事作法、喫茶の心得等々いわゆる僧侶としての身だしなみを身体で覚えるために、朝六時の晨朝法要より始まり修了は夜十二時をすぎてまで講義実習をした。当時矢戸先生も五十歳になられたばかりで、法式界のホープとして油に乗りつつある時期で、私達二十歳の若い者が圧倒されることもたびたびであった。本当に熱気がこもる五日間で、

実戸先生ご自身もその年の浄土宗新聞「みほとけ講座」の中で、その想いを筆せられている。最終日の夕方、五日間の総仕上げの意味で、「三途講式」をおつとめした。三途講式は実戸先生の新作になるものである。今から千年余も昔、恵心僧都が「六道講式」（「二十五三昧式」といい、比叡山横川の元三堂で現在も毎年六月十日に勤められている）の法儀を創作され、僧俗共に法悦に浸り、難解の教理を説かず、修練の技法を用いないで、本当に庶民と共に奉修したものである。その「六道講式」を現在の時間的感覚を考え、「地獄、餓鬼、畜生」の三途に首尾を整えたすばらしい法要（約四十分所要）を、灯明の光の中で修したその感激は今でも忘れることはできない。その感激が、こうして十五年も研修会を続けるエネルギーになったのだと思う。

年月は過ぎ、友人の輪も広がったが、回を重ねて十回目で宗侶としてなすべき葬儀式はじめ主要な法要を習い終えたために、一応解

散も考えたが、新たに大橋寛順先生のもとに掬池晃雄、川村一紀、金子泰蔵、田野島孝道、太田正敬、渡辺俊雄、加峰政信、篠田知並、行正純生、大津茂登、永江憲昭、原正順、兼子達運、岡田玄有、黒川信行、坂村龍玄、森田良法、梶原孝順師らに加わり、引き続いて研鑽することになった。その間、「一遇」という小誌を十号にわたり印刷し、近年『日常勤行式』を再版した。講師も大橋寛順先生、小川貫良先生、大河内義雄先生、太田正敬先生とそれぞれ特色ある講義をして頂いている。

写経会を一般参加者を募って始めたものもこの頃からである。ここ数年写経会は各地で盛り上がりを見せているが、夜七時半より十一時過ぎまで、参加者三十余名と共に、研修僧十三名ほどが、灯火のもとに一生懸命写経す

るのはまことにすばらしいものである。古儀にのっとり、調読、香湯、香水、塗香、触香して入堂した参加者は、灯火の中にうかび出る阿弥陀様の厳そかに心うたれると共に、洒水、道場散華する僧の厳しさに驚き、写経に対する意義深さを感じるようである。その人達がただひたすら一時間程写経をする姿が、極楽におあす菩薩様のように思われ、思わず合掌する。

思えば、現代社会はまことに味気のないそれこそ殺伐としたことが多いが、この中で写経する機会を与えられた人達の喜びの声を素直に受け取り、写経会を続けてきたことをよかったと話合っている。写経が終って三十分程、折々のお説教を聞き、心ばかりの夜粥を食して解散するのである。写経で緊張した腹には、懐石膳で出される夜の粥はなんともいえぬおいしいもののようにである。家内と母が三時間程煮たものに少し味をつけて出すのであるが、年中行事となったこの夜粥も参

加者に喜ばれてなによりである。この古儀にのっとりた写経会も現代に少しづつ合わせ、てなじみ易くした方がよいかもしれないが、やはり今後もまた古儀に準じて続けていきたいと思っている。

多くの方々の支援と協力でこうした研修会を続けてこれたことを本当に感謝し、苦むした山寺ですばらしい写経会や三途講式を修し得た縁は、仏さまの法力でなくてなんであろうか。法式という一つの形を脱して感動を心にしみ込ませる法要をどのお寺でも修し得たら、世の中はもっと明るくなっていくのではないだろうか。そうした機会に遇えば、若い人にも阿弥陀さまが心にすぐ入って来やすいのにと思うこの頃である。

エ
ッ
セイ

セントルイスの夏(二)

—ゲイトウエイ・アーチ—



木の
下
隆

(随筆家)

早いもので、娘のひろみがアーラム・カレ

ッジを卒業して一年が経つ。「卒業前後」と題して何回か書かせて頂いたが、あまり長くなつてはいけないと思つて、セントルイスに

到着するところで、一旦筆を擱いた。

日本を発つ前、いろいろとプランを練ったが、セントルイスに関する資料は皆無に等しく、女房が強く希望したセントルイスからニ

ユーオーリンズへ下る観光船が、現在般行しているのやらないのやらもはっきりしなかった。私はともかくニューオーリンズで、本場のデキシードランドジャズを堪能したかったのだが、

「ニューオーリンズには中南米からかなりの難民が流入していて、治安が悪いからおよしなさい」

と、アメリカ事情に詳しい複数の人たちから忠告されて断念した。はじめ、セントルイスは単なる通過点のつもりだったが、

「セントルイスでは、一応二、三日のんびりするか、デキシードが聴かれないわけじゃないし……」

そう言った私の頭の中で、セントルイスブルースのメロディーが切れ切れに浮かんで消えた。セントルイスについては、猿谷要さんの「西部開拓史」(岩波新書)を専ら参考にしたというものの、かなり行き当りばったりの旅であったことは否めない。

セントルイスの第一印象は、暑いというこ
とであった。両手は荷物でふさがっているの
で、上着を脱ぐことも出来ない。汗をだらだ
ら流しながら、空港ビルの人混みの流れに身
を任せる以外なすべがなかった。吹き抜け
の広場へ出たところで、

「お父ちゃま、あれ!」

と娘が指さす方に、天井からリンドバーグ
の愛機「スピリット・オブ・セントルイス」
のレブリカと、もう一機、いかにもスピード
の出そうなスマートな機体が吊り下げられて
いた。多分、いつの時代にか、スピード記録
を打ち立てた機のレブリカであろうが、私は
その方には目もくれなかった。

「あれ、これはサンディエゴの航空博物館に
あったやつじゃないか?」

「まさか。同じような物が何機もあるんじゃないの?」

「いや、この機体番号には見覚えがある」

とは見たものの、娘の疑問は私にもサン
ディエゴに着くまで疑問として残った。

「スピリット・オブ・セントルイスを、日本
ではセントルイス魂と訳しているが、ちよつ
と違うんじゃないかなあ」

「なんと訳せばいいの？」

「セントルイスの心意気、いやセントルイス
野郎なんてどうだ？」

「セントルイス野郎ねえ」

娘は肯定も否定もしなかった。

「じゃあ、それをバックに一枚撮っておきま
しょ」

残念ながらこの写真は露出不足で、機体番
号は確認出来ず、証拠写真にはならなかつ
た。

タクシーでダウンタウンのホテルに向か
う。ダウンタウンと言うと、すぐ東京の下町
的な街を想像しがちだが、言うなれば霞ヶ関
の官庁街と丸の内、銀座を一緒くたにしたよ

うな、その都市の心臓部なのである。三十分
ほどでホテルに着く。近くにセントルイスの
新しいシンボルである、ステンレス製のゲイ
ト・ウェイ・アーチが西日を受けて、ピンク
色に輝いていた。

「閉館までにはまだ時間があるから行ってみ
るか。歩いて五分もかからないだろう」

窓越しにアーチを見上げて、私は言った。

ホテル備えつけの案内書を読んでいた娘が、
「ふうーん、一九二メートルもあるんですつ
て。ニューヨークの自由の女神より一〇〇メ
ートル近く高いって。お国自慢よね、これ」
と笑った。

セントルイス——アメリカ合衆国のほぼ中
央、北緯三十八度に位置し、ミシシッピ、
ミズーリ両河川の合流点にあるため、東西南
北の交通の要衝として発展した。鉄、亜鉛等
各種鉱物を産し、重、軽工業が盛んで、ウー
ル、木材にかけては世界最大級の市場を形成
しており、また家畜や農産物の集配地でもあ

る。一七六九年フランス人の毛皮猟師がこの地に毛皮交易所を設け、国王ルイ九世に敬意を表してセントルイスと名付けたのがそもその起源で、俄かに脚光を浴びたのは、一八〇三年、時の第三代大統領トーマス・ジェファソンが、ミシシッピ以西の土地（現ルイジアナ州）をフランスから一五〇〇万ドルで買収し、西部への道を開いて以来のことである。これによって、合衆国の領土は一挙に二倍に拡大された（案内書より要約）。一エーカー（約四〇〇〇平方メートル）あたり、たったの三セントだったというから、アメリカは安い買物をしたと言えるが、当時ヨーロッパ征服を夢見ていたナポレオンは、よほど金に困っていたのであろう。

ゲイトウェイ・アーチ（大西部への門）はこの故事を記念して、ミシシッピ河の右岸に整地されたジェファソン国立記念広場に建てられたのである。

「しかし、馬鹿でかいものを造ったもんだな

あ……。一九二メートルねえ……」

などと、アーチの真下から見上げて言っているうちに、首が痛くなった。銀白のステンレスの肌は太陽熱を吸って、触ると火傷しそうなほど熱くなっていた。

「西部劇ここに始まる——ジョン・フォード。とても刻まれていればしゃれてんだがな」

旅疲れか、つい馬鹿げた言葉が口をついて出てしまう。

「ねえ、あの天辺の小窓が観覧室なのね。行ってみましょ、きっと景色いいわよ」

高いところが好きな女房だけが一人浮き浮きしている。アーチの二本の脚部に地下への入口があり、観覧室行のカプセル様の乗り物はこの地下から出発するのである。五人乗りのカプセルが次々に上って行く。人数は乗る時厳しくチェックされるが、私に言わせれば重量制限をした方がいいのではないかと思った。超肥満体の人でも一人は一人なのであ

る。

それにしても、大柄なアメリカ人にはかなり窮屈な乗り物ではある。カプセルはある高さまではエレベーター式にスリットと上って行くが、それから上はエスカレーター式にゴトンゴトンと階段を一段ずつ上って行くような上り方をするのである。

「いやだいやだ！」

閉所恐怖症の女房は、白っぽい顔をして娘の腕を掴んでいる。

「止ったらどうしよう、ひろみちゃん」

「大丈夫よ、ママ。ほら、外に梯子段があるじゃない」

窓の外に複雑な階段と無数の管やケーブルが壁面を這っているのが見える。時々ガタンと大きく揺れる。あまりいい気はしない。約三分で最上部へ着くが、観覧室へはまだ十数段の階段を上らねばならない。

「もう膝がガクガク」

そんなことを言いながら、女房は娘に手を

引かれて上って行く。娘に甘えきった姿である。

観覧室の通路は長さ二〇メートル弱、幅二メートル強で、床はゆるやかに彎曲しており、片側に十六面の覗き窓がついている。我々が入って行った時には、二〇人ほどの観光客が思い思いに外を眺めたりカメラを構えたりしていた。東側の窓からは、すぐ下を流れるミシシッピの泥流と、河向うイリノイ州の平野が一望出来る。河幅は割合狭く、五〇〇メートル位だろうか。数本の橋が対岸に渡され、自動車がひっきりなしに流れている。西側の窓からは、街並が地平の彼方に消えているのが見える。スモッグがかかっているのは、郊外に工業地帯があるのであろうか。そにかく広い、の一語に尽きる。四ブロックほど離れたところに、セントルイス・カージナルスの根拠地であるブッシュ記念スタジアムがあり、すでにライトをつけて薄暮試合をやっていた。

「去年のワールド・チャンピオン、今年はどうかしら。初めてテレビでカージナルスの試合を見た時、懐かしかった、広島カープの赤ヘルを思い出して……」

「あした観に行くか、本場の野球っていうやつを」

「切符があればね」

再び、女房恐怖のカプセルで地上に向かう。

「ママ、夏場は朝八時半オープンだって。あしたの朝もう一度上ってみない？」

パンフレットを見ていた娘が訊いた。

「もう結構よ。眺めはとても素晴らしいけど」

「あんまり親をからかうんじゃないよ。お母さんはいま天国と地獄を味わっているんだから」

地下に開設されている「西部開拓ミュージアム」で開拓者の労苦を偲び、土産物店をひやかして地上に出ると、ミッシェルの河面

にうつすらと夕闇が立ちこめて、涼しい風が吹いていた。メイン・ストリートを通ってホテルに帰る。人通りは少なく、街全体にあまり活気は感じられない。

ホテルの部屋に入ってテレビをつけると、去年のワールド・チャンピオンは、我々の草野球でもちょっと見られないようなエラーの続出で大敗していた。

「もう、球場へ観に行く気、なくしたんじゃない？」

「テレビ見る気もなくしたよ。先に風呂に入るから、明日のスケジュールをお母さんと相談して決めておけよ」

私には私の目論見があったが、今回は二人のスケジュールに従ってやろうと思った。

「……それにしても腹が減ったな」

昼食をとってから、はや六時間が過ぎようとしていた。

(続)

浄土句集

一田牛畝選

るのである。年は取るものでないが、仕方がないと諦めなければならぬ。

下町に住む気安さの瓜をもむ
東京 細田 初枝

老患の朝顔鉢もち入院す
福岡 原 敬二郎

熱燭や高層ビルの光り増す
福岡 安藤平次朗

耳なりも年とあきらめ敬老日
群馬 島津 か寿

孫が来て鬼餅つく月見かな
東京 吉田ゆきあ

連れだちて灯籠流る西方へ
山口 上野 明達

扇風機首振り通しお斎の座
熊本 山崎 石庭

黒板に棚経廻りの覚え書
山形 松田 光誉

評 盆前になると棚経廻りの日や時間の問合せが次々に、又棚経に廻って和尚留守の時にも、黒板に覚え書して置けば、寺族にも分る為めに万事都合よい。

新しく珠数買替えて盆用意
福岡 荒牧 亀齡

評 盆も近くなると珠数の紐が切れていることや古くなっていること等が気になる。新しいものと買替えることも盆用意。

一家あげ月下美人に酔う夜かな
東京 安居 瑣樹

評 一夜の命の月下美人は美しくはかないものである。家族全員が其の花に酔って一夜を楽しんで居るのである。

園静か保母さん一人秋時雨
東京 栗原やゑ子

評 休みの園は保母さんが一人留守して静かである。森に包まれた園は蟬のように時雨がやかましいのである。

老ひの身の故にこたゆる暑さとも
福岡 服部 光代

評 若い頃は暑さも身にこたえなかったが老人となれば暑さ寒さが特に身にこたえ

東京 真野よし子
山莊に取残されしハンモック

神奈川 鈴木美智子
新涼や森背景に仁王門

京都 岩井 玉泉
敗戦日既に歴史の一頁

東京 小笠原香祥
紅芙蓉挨拶交し人を付つ

千葉 須田 牧草
家中を風吹き抜けて昼寝かな

山口 三井 寛静
流灯のまたたきの間に流れけり

東京 末常てる子
風に揺る芙蓉の花のやさしげに

東京 吉原登起子
萩乱れ咲いて山莊静かなる

福井 深井 鉅士
子の如くお墓洗うて老楽し

熊本 山崎 松子
西さして急ぐ精霊舟小さし

東京 田中 秀代
あわれなる声の淋しき秋の蟬

大分 丹羽 雑中
病む我に盆の用意のあるものよ

福岡 上滝津弥音
風鈴のやすらぎ誘ふまろび寝に

東京 猪瀬 幸子
盂蘭盆の仏間につけし父祖の軸

福岡 前田 秀峰
新仏履歴の長き十夜謡詠

福岡 荒牧 木魚
雨乞ひに村人有志山登り

三重 山田 歌甫
僧堂へ廊きしめける法師蟬

福岡 植藤みきを
標高二千残暑を忘れ黒部越ゆ

福岡 荒牧 米子
顔埋めて西瓜食ふ孫菜しげに

山形 松田 允子
絵蠟燭灯り賑ふ地藏盆

福岡 行正 明弘
棚経や沙弥の衣の寸足らず

長野 友刈旋風子
知る人も知らぬも交る踊の輪

京都 岩井 伏水
鬼灯や水子地藏のあどけなき

一田 牛畝
天草の客僧待てる波止焚火

△世相評談▽

仏壇・墓相学のことなど

○仏壇のCM

バイパスや高速道路を車で走っていると、最近特に目につく看板がある。その看板は、とても大きくて誰でも目につく。いったいなんの看板であるかと思うだろう。

それは仏壇店や仏具店の看板である。洋品店や食料店などの看板にひけをとらないほど

大きくて目立つ。

戦前はこのような仏壇、仏具の店などは、そんなに目立った広告をしなかったようである。しかし最近はこちら、こうした大きな、そして目立つ看板とともに、テレビのCMにも仏壇、仏具店のそれは登場してくる。一々どこの店の看板と言われなくてもテレビをみるとよくわかる筈である。

なぜこのような店の看板が出ているのか、

高^{たか}
橋^{はし}
良^{りょう}
和^わ



それはひと口に言うと、売れるからである。売れるから宣伝する、宣伝するからまた売れる。誰でも知っている哲学である。ではなぜ仏壇、仏具がよく売れるのか。

そんなときさまざま、それは国民の信仰が高まったからであると、早とちりしては困るが、その理由としては、金があることである。金があるだけでは、仏壇は買にくい。よほど余分に金が入ったからである。

というのは、農村をはじめとして土地の所有者が、先祖代々の土地を手放してそれを金に替える。全く一獲千金である。

あの土地が売れたのか、これは祖父が買っておいた土地である。何千万、何億という金を得られたのは、祖先のおかげである。

このように考える人々の何人かは、祖先のために、その菩提寺に永代経や祠堂金をあげる。菩提寺でも何十万という永代経が志納されるのは、寺としても嫌いではない。まことにいいねいにその法会を営む。すると、施主

はますます感激して、それなら家の仏壇は、昔のもので価値はあるが、残念ながら金箔が剥けている。それなら塗り変えてもかなり金額がかかるのなら、いっそのこと新しくしようというので、何十万、何百万の仏壇を買うことになる。

風が吹くと桶屋が儲かることと同じである。

そこで菩提寺でも寄附金が志納されて仏具を購入することになる。そこで仏壇屋の利益があるということが、いわゆる仏壇、仏具の店の看板やCMが出るというわけである。

このことが、すぐさま宗教心の高揚につながらないかもしれないが、しかしこの現象はさらに培うことによって信仰心に進めることが出来る。

それを握っているのが、宗教家であり、僧侶であると思う。果たしてそのようなよき機会を生かすようにすることが出来るかどうか。

この仏壇、仏具ブームをして真に信仰心と

結びつける働きが必要であるといえる。

○墓相学という御幣かつぎ

最近、墓相学というのが著しく脚光を浴びている。

また、それにふり廻されている御幣かつぎがある。

果たして墓相学という学問があったかどうか、昔といっても戦前は、そんなものがなかったことは、たしかである。

これも仏壇、仏具ブームの便乗とみてもよい。家庭が豊かになってくると道具や家を新しくする。人間は誰でも自分の周囲を美しくしたいものである。道具や家が新しくなってくると、最後は先祖の墓をつくる。都会の寺では墓地がもうない。それに目をつけた業者が、霊園を造成した。

我が国の至るところに、霊園があつて何千基、何万基の墓が建っている。都心から離れ

たところに霊園が造成されても結構墓が建てられている。自家用車があるから、少しの距離ぐらゐは、車で行けるから、老人でも子供にハンドルをもってもらつて、お参りが出来る。

これらの墓は、みんな新しい墓である。そこで、安い墓より高い墓を売りたいというのは、霊園側も、商売であるからやむを得ない。

そこでこの墓相学というのが、登場してきて、やれ縁起が悪いの、不幸があるのと、まくしたてる。

墓を建てる側には、墓の知識などないから石碑屋の言いなり放題である。この字を用いると、未亡人になるの、家人が病気になるの、それをまことしやかにまくしたてる。

ちょっと申しあげるが、墓相学という学問があるのかどうか、それを承りたい。そんなものは、学問の世界であるわけがない。墓相学という以上は、学問の世界である筈である

が、そんな研究を靈感でやっているのが、墓相学である。

第一日本中にある何十万とある墓のなかの何億といった石碑を調査したのかどうか、それを承りたい。

それは一つや二つの墓の石碑は調査したかもしれないが、統計となると、そんなことで統計学がなり立つほど、この学問にはデータが必要である。墓の施主の一人や二人死んだからといって、それが墓相学とはおそれいる。

もう一つこの墓相学に似たものに印相というものがある。ハンコの文字あるいは篆刻で、吉相があるとか、不幸があるとか、とてもないことだ。この印相もときどき変るといふから、おかしいことである。

勝手にきめて、勝手に流行させる。そして売れてハンコがつくられると、誰かが利益を得て儲ける。それに乗って御幣かつぎ屋は、ハンコをどんどんつくり替えている。誰かが

どこかでせせら笑っているような気がしないでもない。

ハンコならつくり替えられるが、一度つくった墓となれば、一生ものである。悪いといつてつくり替えるわけにはいかない。

そこがつけ目であろう。

墓相学に迷わされて右往左往する人が多くなってきた。先祖を祀る墓に、迷いが生じることは、本人の心の問題である。

○ ハワイに浄土宗が

開教して九十周年

ハワイに浄土宗の寺が出来て九十周年になる。

各宗通じて一ばん古いのである。もともと本派本願寺が古いようになっていたが、それは現地の僧が、開教事情を調査したのは、あちらさんが先であるが、内地から僧侶を開教使として派遣したのが、浄土宗である。

開教使の第一号が、二人ある。一人は信州飯田の松尾台定師、もう一人は当時山口から赴いた岡部学応師である。そのうち松尾師は、途中で病氣になり、内地に帰還してから、東京の病院で死去した。岡部師は、ハマクワ浄土院、当時のハワイ島のハマクワ仏教会堂を開設し、更にオアフ島の会のハワイ別院を開創している。

この二師は、マウイ島から、ハワイ島のラッパホエホエに上陸したが、このところは、岩礁でとても船が岩につくことが出来ず、仏像を背中に負っていのち綱をもって上陸し、その仏像を馬の背に乗せてキビ畑のキャンブで働く労働者の群に伝道したのである。

おれたちは、女とバクチと酒である、抹香臭いねんぶつなどは、無用だ、と追払われたが、それにも負けずに伝道した。

やっと話を聞いてやろうというので、その人々のために建てたのが、ハマクワ浄土院である。それでハマクワ浄土院は、最初は各宗

仏教の寺といふので、ハマクワ仏教会堂と言ふた。

そのなつかしい文字が、この寺の門柱に刻まれている。この寺は、最初の寺として、ハワイの文化財の指定をうけているらしい。

そして今回の開教九十周年を機会に、この第一号の開教使岡部学応師の胸像が、ハマクワ浄土院境内に建てられることになり岡部師の遺族はじめ広く教師が、その募財に協力している。

血のにじむような初期開教の苦勞である。

岡部師は、開教使第一号であるし、松尾台定師は、殉教第一号であると思う。

十月十二日から約十日間にわたって藤井門主がハワイ各島の寺院に親教して、この意義深い大法要を盛りあげることに成功した。

浄土宗の今日あるすがたのなかに、苦難の開教の歴史を肝に冥じて、若い世代の人々は、教化に努力すべきではないだろうか。

浄土宗のハワイ開教(三)

新保義道

(前浄土宗ハワイ開教総監)

三 浄土宗の開教

ロ 浄土宗開教区制度設立以後

浄土宗の開教制度が設立されたのは一八九八年(明治三十一年)で、同年八月六日教令で開教規則十六カ条が發布された。その中で開教区を次のように定めた。

第一開教区 鹿児島諸島、沖縄

第二開教区 台湾各地

第三開教区 朝鮮

第四開教区 ハワイ

(但しその後度々変更があった)

開教が一宗事業となつたので、布哇宣教會の使命は一応達成された。そこで浄土宗は八寿田大定を開教使に任じてハワイ島に派遣すると共に、既にハワイにいる田中摩訶衍をも開教使に任命した。以下各浄土宗教會堂の創立から最終のエワ浄土宗教會堂が設立された一九一七年までの草創期について書くことにする。

◎ ララパホエホエ教會堂

八寿田大定は一八九九年(明治三十二年)二月日本を離れハワイ島ハマクアに赴いたが、同年六月そこを去ってラウパホエホエに教線を進め、同年二階建の教會堂を新築、同時に日本語教育をも始めた。明治三十三年伊藤円定着任、同三十六年小林了秀、同三十九年天鬼憲達が赴任し翌年學校を新築、四十一年に三階建に改築した。明治四十四年(一九一一年)江川岳天、大正三年(一九一四年)吉原自寛、大正六年佐山學順が着任している。

◎ ハマクア浄土宗教會堂

前述の如く一八九六年(明治二十九年)岡部学応によって創設され、翌年田中摩訶衍が着任した。田中は同三十四年九月教會堂内を教室に充て、日本語教育を開始し、併せて教会、寄宿舎、住宅を増築した。次で池田常然が着任し多額の負債を償還した。一九一八年(大正七年)第四代吉田良雄が創立以来二十年を経過し改築の必要に迫られ七間四面の日本式本堂を新築した。同師代二名の開教使が駐在し、名護忍亮はホノカワア小学校主任、原哲雄はパウハウ小学校主任として活躍した。

註4 小学校というのは学校令によるものでなく、当時日本語學校を○○小学校又は○○日本人學校と呼んだ。殆んどが公

立学校の公私立の正規の学校はイングリッシュ・スクールと呼んだ。

◎ オーラア仏教会堂（後のカーチスタウン浄土院）

伊藤円定は一九〇〇年来布し最初ラウバホエヘで八寿田を補佐していた。ところがハマクア及びラウバホエホエは共にハワイ島北海岸中央部にあり、当時ハワイ最大と言われた東部のオーラア岩崎キャンプ（砂糖黍請負で成功した岩崎次郎の名をとった）に仏教会堂も日本語学校も無かったことから、同年オーラアに移り、山県ホテルの一室を借りて布教を始め、一九〇三年（明治三十六年）現在地に教会堂及び学校を建築し、オーラア仏教会堂と称した。二代羽田信道は一九〇八年（明治四十一年）会堂を改築し、併せて近傍の土地を購入して寺の基礎を定めんと努力中不幸にも殉職した。三代上野山秀徹は前任者の意志を継承してハエーカーの土地を購入しその地代を以て教会の基金とした。

◎ カバアウ教会堂（後のコハラ寺、コハラ浄土院）

安西承信は一九〇一年（明治三十四年）七月来布し、初めハマクア教会堂で田中を補佐し、翌年二月同島西北端に近いコハラ地方に赴き翌一九〇三年（明治三十六年）四月同地方の中心地の現在地に教会堂を新築した。二代木村猶恵は日本語学校を設立、三代立川真教はそれまで寺にあった日本語学校をホノマカウに移し付属校として運営した。四代中西忍海を経て五代中村浄真は経蔵を建立し大蔵経を取めた。経蔵を持つ寺は浄土宗ではこの寺のみである。次で浅井法隆が六代となった。

このようにして、ハワイ島の北海岸中央部のハマクア、ラウバホエホエ、東部のオーラア、西北部のカバアウと、ほぼ北海岸に沿って四カ寺が建立されると、これを統制する必要が生じ監督の派遣を宗門に度々要請した。一九〇三年（明治三十六年）三月、浄土宗管長はハワイに於ける開教使を統制監督する為、清水信順を開教使長と

して派遣し、開教使岩崎秀孝が随行した。

清水開教使長はハワイ島ラウバホエホエ教会堂に仮本部を置き、開教事務監督並び、布教の普及発達に当たった。随行の岩崎は後ハマクア仏教会堂詰として任地に赴いた。

◎ ハカラウ教会堂

相馬千里が一九〇四年（明治三十七年）七月ハマクアとオーラアの間、ハカラウのダンブロ・キャンプのパン焼小屋の一室を借りて日本語教育を始め、同年ハカラウに二階建の教会堂を建立し階上を布教場、階下を校舎に充てた。二代鈴木応善が一九〇九年（明治四十二年）これを改築し、三代松井輝道を経て四代立川真教が寄宿舎を建造した。外に山口隆戒が駐在として彼を補佐した。

◎ ワイナク浄土宗教会堂

ラウバホエホエ第三代小林了秀が後を天鬼憲達に譲り、ヒロのワイナクに移り一九〇五年（明治三十八年）教会兼教室を建立しワイナク浄土宗教会堂と称し、翌年寄宿舎を建築した。二代清水観頌は一九〇九年（明治四十二年）会堂を増築し、三代斉藤源道を経て四代土井定秋が一九一三年（大正二年）現在地を購入、建物を移転し、一九一六年（大正六年）住宅を新築した。名護忍亮が五代となり、後年大改築をした。

◎ ハヴィ教会堂

一九〇五年（明治三十八年）同耕地の人々の要望によって、カバアウ教会堂二代木村猶恵がハヴィ・キャンプに日本語学校を始めたのがこの寺の起りで、翌一九〇六年鈴木応善が校舎を新築、三代中西忍海が一九〇九年（明治四十二年）殿堂を新築した。四代中川大仙が一九一四年（大正三年）開教使住宅を建て、同年八月御宮殿始め仏

具が整い、勅額奉掲、御本尊遷座法要を勤めた。彼は後年社団法人進徳会を組織して六エーカーの土地を入手している。

◎ 浄土宗開教院（後のハワイ浄土宗別院）

浄土宗が一八九四年ハワイ開教を始めて以来新築された七つの教会堂は総てハワイ島に限られ、開教本部も亦同島にあった。一九〇〇年（明治三十三年）ラウバホエホエに派遣され、一九〇三年オーラアに教会堂を建立した伊藤円定は、ハワイに浄土宗を広める為にはホノルルに進出せねばならぬと考え、一九〇五年（明治三十八年）七月ホノルルに移り、同市カカアコ・サウス街にある土人の家の一隅を借りて専心布教に従事した。そして一九〇七年（明治四〇年）清水開教使長を招いて開教本部をホノルルへ移した。

同時に敷地を借りて七間四面二階建の殿堂を新築同年十一月十六・十七の両日新築落成と入仏慶讃法要を修し「浄土宗開教院」と称し、ハワイの主都に於ける伝道の拠点とした。これは当時各宗を道じて第一位の堂々たるものであったという。

一九〇九年（明治四十二年）清水開教使長が辞任帰国したので、伊藤円定が第二代の開教使長となった。彼は女学校を開設すると共に布教振興に全力を傾けたが、一九一七年（大正六年）九月大檀林深川靈巖寺特命住職となつた為辞任帰国した。

◎ ヒロ教会堂（後のヒロ明照院）

一九〇七年（明治四〇年）清水観頌が、ヒロ市ワイアケア街の橋本幸右衛門宅の二階を借りて仮布教所としたのが最初で、一九〇九年（明治四十二年）ピオピオ街に二エーカーの土地を借りて宏荘なる教会堂を建立、一九一四年（大正三年）付属実践女学校を創立した。更に寄宿舎、炊事割烹室を設け同胞女子を収容し教育に当った。そして

一九二〇年（大正九年）辞任帰国した。

◎ プウネネ（マウイ）仏教会堂（現カフルイ浄土院）

一九〇九年（明治四十二年）秋、二十七歳の青年僧原聖道が、浄土宗教会堂の無いマウイ島開教を志して、新任の室山実静を伴いラハイナに上陸、同地の青木ホテルに一週間滞在し野外伝道を行った。次いでワイルクを経てマウイ島の表玄関、カフルイ（岡部の上陸地）の花岡旅館を一時的根拠として各方面に出張、野外伝道を行った。この間室山はカワイ島へ出発している。室山と別れた原はプウネネ耕地東五番を仏法有縁の地と定め、耕主に仏教の開教使として耕地内に常住することの承認を求めたが、キリスト教徒たる耕主は最初の内は難色を示した。然し再三の交渉の結果、遂に彼の熱意を了として労務者舎宅の一室を貸与した。そこで、同所を仮布教所として最初は徒歩で、後には乗馬の寄進を受け遠近に出張布教、翌一九一〇年（明治四十三年）^{（註5）}耕主の好意で土地の貸与を受け僅か三カ月で、二階建教会堂を完成しプウネネ仏教会堂とした。本拠が確立したのでラハイナとワイルクに浄土宗仮布教所を設置し、又キヘイ及びクラ両日本語学校を本宗の手に入れ、夫々曾田賢雄、吉水天瑞を送り教線を拡張した。

一九一三年（大正二年）三月二代大田秀山が夫人と共に着任、一カ月後貧児、孤児、不就学児童を預って教育し、後これを発展解消して実科女学校とした。一九一六年（大正五年）六月マウイ実科女学校校舎住宅を新築、八月には教会堂を改修し二年後帰国した。

註5 ハワイ浄土宗教団発行「洋上の光」、森田栄著「布哇五十年史」、同「布哇日本人発展史」等には教会堂建立が一九一一年（明治四十四年）とあるが、原聖道の手記及び勸募帳により一九一〇年が正しい。

◎ コロア浄土宗教会堂

室山実静が未だ浄土宗の布教が行われていないカワイ島に渡ったのが一九一〇年一月で、各地巡視の後翌二月本郷某の家の二階を借り仮布教所とした。同年六月コロア浄土宗教会堂を建立した。二代原田玄徹、三代吉田達祐、四代伊藤賢成と次第した。

◎ カバア教会堂

一九一一年（明治四十四年）十二月吉田達祐がコロア教会主任室山実静に伴われてカバアに至り、中国人所有の家屋を借りて仮布教所として伝道を開拓した。翌二月原田玄徹が主任となり、同年九月（大正元年）殿堂を新築し、カバア日進小学校を設立した。

◎ ハレイワ教会堂

一九一〇年コロア教会堂を建立した室山実静は、二年後の一九一二年（明治四十五年）五月浄土宗教会堂の無いオアフ島郡部のハレイワに赴き、初め中国人所有の一民家を借りて布教所とした。翌一九一三年（大正二年）白人所有のシーサイド・ホテルを敷地共に購入、階上を本堂、階下を付属日本語学校及び開教使住宅とした。一九一五年（大正四年）七月宮本文哲がこの教会を継ぎ、一九一八年（大正七年）本堂建物の両側に一階建本造校舎を増築した。

◎ ラハイナ教会堂

一九一〇年（明治四十三年）ブウネネ教会堂創立者原聖道がこの地に仮布教所を設け、斎藤源造を迎えた。斎藤は一九一三年（大正二年）土人より土地を借り教会堂を建立した。間もなく斎藤は他に転任し、瀬尾義定が着任した。

◎ ワイルク教会堂

ここもラハイナと同様ブウネの原聖道が仮布教所を設け伝道を始めた。彼の辞任後、ブウネを継いだ大田秀山は一九一五年（大正四年）教会堂を建立し、内山信孝の派遣を得て同師が第三代となった。

◎ エワ浄土宗教会堂

一九一七年（大正六年）島田隆道がキリスト教の盛んな当地へ来て教会堂及び付属日本語学校を建設した。

このようにして岡部学応が一八九六年ハマクアに最初の浄土宗寺院を建立して以来二十一年間に、ハワイ島に八、マウイ島に三、オアフ島に三、カワイ島に二と、四つの島に計十六カ寺が続々建立され、本宗開教の根拠が出来、発展の基礎が定まった。

これら創立者及びこれに続いた人達の巡回布教は、交通は不便であり、日本人移民は皆労働者で時間から時間までは一寸の暇も無いので夜を待って布教を始める。帰途砂糖畑やキヘベ林の中で迷子になって野宿したり、足の底豆で歩くことが出来なくなったり、強烈なスコールでぬれぬずみになったり、椰子の実やバナナで二日も三日もくんだり、或は伝染病患者の看護をしたりの日々で、到底今日の我々では想像も出来ないようなものであったことは、彼等の手記によって明らかである。岡部学応及び原聖道が二十七歳と判明しているように彼等の殆んどは二十歳代の年齢で、前述のような移民の状態の中で布教することは余程徳行が優れ、意志が強固でない限り布教の効果は上らなかつたことと思う。然し開教のパイオニア達は言語に絶する苦難と、血のにじむような努力で事実それをやりとげたのである。

最後に補足として、創立者によって教会堂が建立されて以来今日に至る間、新築或は移転新築について書くことにする。

先ず新築としては、一九五一年カバア浄土院は北島昌雄の努力で現在の本堂が新築された。ラハイナ浄土院は一九六八年本堂焼失後原源照の努力と日本の実業家大森正男の絶大なる援助によって、今日ハワイの名勝とも言われる純日本式本堂、三重塔、鐘楼、大仏が建造され、一九七五年には白鳥舜成によってハレイワ浄土院の本堂、ホールが完成している。

移転については、先ずハワイ浄土宗別院が地の利を得ていなかったことから福田開正によって、一九二八年現在のマキキ街に三エーカーの土地を購入し、一九三二年現在見る大殿堂を建立した。上述のラハイナ浄土院は久保田賢道（現加藤姓）によって一九三一年現在の海岸の景勝地を購入し建物を移転している。ヒロ明照院は一九六〇年のチリ津波で壊滅し、同地域は移転地区に指定され、政府の援助もあって日野秀瑞代の一九六四年に現在地に殿堂、ホール、住宅を新築した。

近年のハワイは砂糖産業・パイナップル産業の没落により各島で砂糖耕地、製糖会社、パイナップル工場の閉鎖が相次ぎ過疎問題が仏教寺院をゆさぶっている。この過疎対策に成功したのがブウネネ浄土院（現カフルイ浄土院）である。二千戸近い労働者用住宅があったブウネネ、パイア地区のキャンプを閉鎖し新開地へ移転するよう耕地から発表のあったのが一九五九年秋であった。耕地が提供していた住宅のみで寺はそのまま居続けてよいというものであったが、筆者新保義道は主任として、直ちに新開地への移転新築を決意し、着々手を打った。私が「人災」と名づけた信徒と寺の同時移転はなまやさしいことではなかった。然し信徒と開教使の涙ぐましい努力によって、漸く十年後、労力奉仕で本堂、ホール、教室、住宅を現在地に新築し、名称もカフルイ浄土院と改めた。これは各宗、各島を通じ最初のものであった。将来人口五万の街造りを目指すカフルイの中心地に位置し最も将来性がある寺である。

（了）

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東 京) 八 一 八 二 八 七

たり、仏を傷つけたり、教団の破壊活動をやった者は、無間地獄へ逆落しじや」

「阿闍世王は提婆達多にそのかされたりはしたんでしようが、その五逆罪を四つまで犯したんでしよう」

父頻婆娑羅王を死へ追いやった。酒を吞ませた酔象を釈尊一行の列へ暴れこませて仏弟子を殺した。山上から釈尊めがけて大石を転落させ、仏身に血を流させた。精舎の修行僧たちを煽動、あるいは弄絡して提婆のもとへ脱走させたのである。

「母親の韋提希夫人だけは辛らくも手をかけずに済んだだけだ」

「そんな阿闍世王が、なぜ無量寿経では阿彌陀仏に救われて地獄へ堕ちないで浄土へ往生できるようになったのですか」

「サビヤよ、よくぞ言った。その理由が明確になっておらない。明確になっておらぬからこそ、同じ無量寿経でも阿闍世王の「授記」箇所を削除してしまったのだ」

「尊者は私に、その削除した方を教えて下さっています」

少年の青い瞳は鋭く老師を凝視してくる。

仏法へ向けた容赦のないきびしさであった。

私淑しつくしたわが師といえども曖昧さは許さないのである。尊者はたじたとなる。

「お前が指摘したとおりだ。わしはお前に無量寿経が何であるか、その輪廓だけを教えておくつもりだった。しかしお前が今そこまで核芯へ心を没入させたのであれば、わしも対応を改めねばならない。阿闍世王「授記」の部分の削除したこと自体に誤りがある。不備さがある。阿彌陀仏はすべての衆生を救済するという誓いを立てられた。そしてそれを成就して西方浄土に仏として実在されている。すべての衆生と言うからには、五逆罪を犯した悪人といえども例外として扱うことは許されない」

「タパス尊者。それをうかがう前に阿闍世王一人を救うために釈尊は涅槃へ入るのを中絶

された、とありました。そこまでは羊皮紙の
経典で読んだのですが、あのあとはどうなっ
たのでしょうか」

「大般涅槃経でお前が未だ読んでいない部分
のことだな」

洞窟内には緊迫の気が、師弟の間で一本の
強靱な金属線のようにびーんと張り渡され
た。

「どんな経過をたどって阿闍世王は救われた
のでしょうか」

「うむ。釈尊はまず月愛三昧に入り、それに
よって我が身から発する光明で悪王の疾患を
除去されようとなされた」

「月愛三昧とは？」

「経句は語る。月光愛すべく、以て人の熱悩
を除くがごとく、釈尊この三昧に入れば淨光
を以て衆生の貪りや瞋りの熱悩を取り除くこ
とができる。つまりだな、夜陰の月光が花卉
を開かせることがあるように、悪に染まった
身は夜陰の花みたいなものだ。これに正しい

生命を息づかせるためには月光でなければなら
ない」

「その月光を浴びて阿闍世王は……」

「うむ。月光で身を清められたはずなのに悪
王は未だ釈尊はもとへ赴くのをためらった。
異母弟でマガダ国の大臣耆婆は悪王を口説き
続けた。彼は熱心な仏徒であったし、例の悪
王が母韋提希の前髪を掴んで引きずり倒し殺
そうとしたとき懸命に諫止した男だ。ようや
く悪王は娑羅双樹下に横たわる釈尊を訪ねる
気になる。それでも途中なお心は迷う。それ
を見抜いた釈尊は決意をうながす靈氣を道中
の悪王へ向けて集中する」

「それで、ついに対面できたのですね」

娑羅双樹林へはいってきた阿闍世王はすぐ
には釈尊の所在を探がしあてることができな
かった。すると八色の声が樹間に響きわたっ
た。「大王よ、大王よ」——阿闍世王はきょ
ろきよる四跏を見まわした。大王などと呼ば
われる立派な王がこの辺りにいるのだらう

か。しかし最後に決定的な呼びかけがあった。「阿闍世王よ」——彼は悦び勇んで声が發した地点へ駆け寄った。感動の挨拶を言上する。「いま私はどんな神に声をかけられても悦ばないでしょう。しかし釈尊の一声は私の全身全霊をゆさぶりました」そうであらう。これまで数々の悪意、悪業をぶつつけてきた相手から親愛と敬意をこめて「大王よ」と呼ばれたのである。

かくて釈尊の「一面に坐し」た阿闍世王に向い諄々と説きおこすのであった。凡夫の心がけるべき二十事についてである。列記すると(一)この身中は空であって無漏はない。(二)あらゆる善にも根本はない。(三)生死も順序立ったものはない。四深い穴へ落ちこむというが、その地獄も恐るるに足りず。(四)どんな方便で仏性を見ることができようか。(五)どんな禅定をきわめても仏性は見られない。(六)生死はいつも苦であって淨らかさなどない。(七)八つの難を遠ざけることは不可能だ。(八)つねに

怨を抱く者によって追いまわされるであらう。(三)一つの法であらゆる実存をとらえることはできない。(二)三悪趣のなかで解脱は得られない。(三)誰もが諸悪邪見を本来所有している。(四)未だ五逆罪を克服する方法は発見されていない。(五)生死のぎりぎりを誰もが見きわめることはできない。(六)諸業を造らず、果報は得られず。(七)自分を作っても他人には無縁であって空しい。(八)楽しく生きる方法が不明なのだから当然、楽しい結果も期待できない。(九)もし業を造れば、果は遂に失われず。(十)無明からすべてのものは生じ、また、そのために死んでゆく。(十一)過去も現在もつねに放逸で終始するものだ。

これが凡夫の姿なのだ、と釈尊はさとした。この二十項に及ぶ実態を正確に觀察しておかないと心は放逸、悪から悪へと追いまわして生きる結果になる。

このあと釈尊は、父の頻婆娑羅王が犯した罪について語った。父王はあるとき鹿狩りに

いった。だが一頭も捕らえることができなかつた。帰りがわ原野の一角で座禅を組んでいる仙人を見かけた。「此奴がいたために鹿が一頭も寄りつかなくなつたんだな」と怒り、家臣に仙人を殺させてしまった。仙人は息を引き取る瞬間、頻婆娑羅王を睨みつけて呪つた。「この譬(あだ)はきつと返してやるぞ」と。父王は気味悪くなつて仙人の屍体を丁重にその場へ葬つた。

聖王とうたわれた頻婆娑羅王でさえ、こうした悪事を犯している。凡愚の世界の人であつた。

「釈尊は大般涅槃経でこういう言葉を用いておられるな」

タバス尊者は言つた。

「どんな言葉を？」

「このゆえに先王もまた不定なり。不定のゆえに(阿闍世)の殺もまた不定なり……つまり凡夫の世界とは、すべてが乱心の組合わせなのだとな。殺し殺されつするの凡愚なるが

ゆえの宿根じゃ。阿闍世王の殺人も凡夫散乱による結果にすぎない。凡夫が救われるのであれば、この殺人者阿闍世王も救われねばならない」

「それで、どんな救われかたをしたのでしようか」

「うむ。悪王は釈尊に誓つたよ。私は今後つねに衆生のための父母となりますとな」

「そんなことで……」

「そんなことでしかない。おのれの罪をつぐなうためには一人でも多く他人を救うのだという」

「釈尊はそれで諒承されたのですか」

「涅槃経の経句では救われたことになっている。釈尊は悪王の決意を聞き、善いかな善いかな、汝必ずよく衆生の悪心を破壊せんことを知る、と褒めたたえた。悪王もさらに言う。もし我れよく衆生の悪心を破壊せば、我れをしてつねに阿鼻地獄へ堕ちて無量劫の中、もろもろの衆生のために大苦悩を受けし

むとも以て苦とは為さずとな」

「やっぱり阿鼻地獄へ堕ちて苦しみ続けるの
でしようか。それが救いなのでしょう」

少年サビヤの面上から腑に落ちない思いは
消え去らなかつた。

十四

語り続けているうちに洞房の外で夜は白々と
明け放たれていた。しかし老尊者も少年の
眼に睡夢へ接近しようとする倦怠や労衰はひ
とかけらも混じりこんではこなかつた。

「尊者よ、それで阿闍世王はそのあと沙羅双
樹下の誓いを実行したのですか」

「たしかに実行したぞ。例えばマガダ国の領
内の農夫が俄かに発心し、耕作を中止し頭髪
を剃り三衣を着して結跏趺坐に入つたと聞く
や彼はそこへ出かけていって、大地に額をす
りつけて礼拝をくり返したという。つい先ご
ろまで農事を怠る者を引つ捕らえ、きびしい

罰を加えた苛酷誅求の王とはがらり一変して
いる。また王舎城に五百人の比丘衆を集め、
仏説をまとめさせた結果には財心のすべてを
傾けた」

「それで阿闍世王の死は？」

「うむ。母子相姦の關係になった王妃ともど
もに息子の優陀夷跋陀羅に殺されたな」

「ああ……」

「その優陀夷跋陀羅もマガダ国王になった
が、やがてその息子にまた殺されたな。あの
家系は頻婆娑羅王以来、五代にわたつて父王
は息子に殺された。そしてマガダ国は滅亡し
てしまった」

「ああ、それが救いでしょうか」

少年サビヤの青い瞳に水滴が宿つた。タバ
ス尊者は乾いた表情を微動だもさせなかつた
が、大ぶりなうなずきだけはくり返した。

「そのとおりだ、サビヤよ。救われておら
ぬ。まるで救われておらぬ」

「無量寿経で阿弥陀仏がすべての衆生を救済

するとお誓いになったあの誓願が、阿闍世王には適用されなかったのですか」

「だから先ほども申したであろうが、阿闍世王『授記』を削除した無量寿経がまかりとおっておるとな。經典の不備だ。法蔵比丘——阿弥陀仏の誓願が未だ徹底して伝えられていない、ということじゃよ」

「どうしたら徹底するのでしょうか」

「無量寿経そのものを、とことん観想した新しい經典が造られねばならない」

「新しい經典を造るのですか」

「そうだ。凡夫、悪人が阿弥陀仏の悲願によって、どのようにして救われてゆくのか。そのさまと論旨を明確に描き出さねばならない」

「しかし尊者。その新しい經典は造作されるのでしょうか」

「造作だと？ そんな真似は許されぬ。偽經は害毒を流すだけだ。典拠があるはずだ」

「あるはず……」

「阿難尊者の系列經典を探ぐってゆけば、必ず突き当るであろう」

「尊者は、阿難尊者の經典というものをご存じなのですか」

サビヤは探ぐるような視線を向けた。これまでに学習した大乘經典では、しきりと釈尊が阿難に語りかけてはいるが、阿難自身が遺したと伝えられる經典にめぐり遇ったことはなかった。

「わしも未見、未聞じゃ」

タバス尊者はあつさり兜を脱いでしまう。

「どこを探がしたらいいのでしょうか」

「それもわからん。ただなあサビヤよ。阿難尊者は多聞第一とうたわれた仏弟子ぞ。生存の釈尊から多くの教説をお聞きになったはずだ。ことに無量寿経では大きな役割を果たしておる。必ず遺經があるはずだ。たとえ断片ではあってもな」

「尊者がそこまでおっしゃるからには、どこか見当ぐらいはついておられるのではないで

しょうか」

「うむ、それだ。見当だけだが、わしは部派の連中が隠匿していると睨らんでおる」

「部派の連中がですか」

「例のカニシカ大王がカシミールで第四次結集を執行された。大王の目的は、大乘と小乗とに分裂し、さらに小乗教団の内部でも二十部にもなつてしまい、各自が自派を主張してゆずらない仏教教団を素志へ回帰統一させることだった。だが結果は部派教団（説一切有部派）が主導権を握っただけに終つてしまつた。そればかりか部派の連中はその折に成文化した経典のすべてを持ち去つた。今お前に教えている無量寿経にしても部派教団にはちゃんと文字化したものがあつたのだ。部派の連中が門外不出、独専したためにわしはわざわざ旧マガダ国の「鷲の峰」にまで出かけねばならなかつた。それはともかく、あの大経（「無量寿経」）を詳しく観想解明した経典が必ず存在しているはずだ」

「すると尊者、このあたり朱駒波城内の部派教団を探ぐつても発見する可能性はあるわけですね」

「それも有り得る」

阿難は釈尊十大弟子の一人に数え上げられた高德だが、彼にまつわる伝承は余り芳しいものではない。不名誉な行蹟、というよりも人間味あふれた逸脱や失敗が多い。

阿難は仏弟子中、第一の美男子であつた。

少女マーガンタとの恋物語が紹介されている。小川のほとりを通りかかった阿難が、そこで水汲みをしている少女に水を所望した。この出会いが少女を恋の捕虜（とりこ）にした。マーガンタの母は妖術の心得があつたので、阿難をわが家へ誘引して娘の想いを遂げさせようとする。

これを透視した釈尊は出かけていって少女マーガンタに会う。若き修行僧との愛慾が如何に邪淫であるかを説いているうちに、いつか少女の黒髪は脱け落ちて比丘尼姿になつて



變
尼



いたという。

この伝承は、阿難が女性の信者集団——比丘尼教団の創始者だったところから発したように思われる。

釈尊の叔母が強く出家を希望した。すでに釈尊は入寂しており教団では処置に窮した。このとき教団に比丘尼が在籍しても差支えないことを強く主張したのが阿難であった。これがきっかけとなって女性の入信者が続々と教団へ投じてきた。

「尼僧の告白」(テリーガーター)の岩波文庫版「あとがき」で中村元博士は次のように書いている。

——尼僧の教団の出現ということは、世界の思想史においても驚くべき事実である。当時のヨーロッパ、北アフリカ、東アジアを通じて(尼僧の教団なるものは)存在しなかった。仏教が初めてつくったのである。仏教が出現してから百年余り経ってから、シリア王

の大使でギリシャ人であるメガステネースがインドの大王のもとに来て、その見聞記をギリシャ語で残しているが、その中で言う。

「インドには驚くべきことがある。そこには女性の哲学者たちがいて、男性の哲学者たちが伍して難解なことを堂々と論議している」

釈尊の滅後早くも尼僧集団が出現した事実を物語る。阿難の果たした役割が推量できるであろう。キリスト教の修道尼があらわれる数百年も前のことである。

ところが釈尊の叔母(養母でもあった)マハーパジャヤーバティを出家させたことで阿難はきびしく批判された。尼僧集団を許したために、仏教の正法は千年続くところが五百年に減じた、と嘆く經典があらわれた(「比丘尼健度」)。また阿難七つの過失のトップにこれを挙げるものもある(「摩尼母経」)。

七つの過失、その主たるものは釈尊が涅槃へ入られたときの処置が指弾されている。た

たとえば、釈尊の死体の陰部を多数の女人にさらけ出して見せた、という非難だ。阿難はこれを女人たちが将来、愛欲での狂わしくなったとき、釈尊の陰蔵相を思いうかべて欲染の炎を消させるため、と弁明する。また一老母が釈尊の遺体に近づき、仏足に頬ずりを寄せ涙で濡らすのを阿難は放置したという。あるいは病中の釈尊が水を求め、阿難は河へ汲みにいったがひどく濁っていたために空しく枕頭へ戻った。ところが雪山に棲む鬼神が同じ河水を釈尊に献げ、口もとへ運んだらいつさいの濁りが消え去っていた。つまり阿難には釈尊の濁水を浄化させる靈力について全く無智だったという過失がある。

釈尊滅後四カ月ほどして開かれた王舎城結集で、阿難は「仏道を成じていかなかったので無資格者だったが、釈尊の身辺に二十五年も侍したという経歴を買われて五百人の討議者に加えられていたのである。

この五百人の数字だが後世は「五百羅漢」

などで広く知られる。しかし会議員を「五百人」で構成させるのはギリシャのポリス社会の会議方式と酷似している。「南伝・大般涅槃経」の冒頭にある阿闍世王の独裁国家を退けてヴァジ族の共和制を支持した釈尊の考え方からもこの民主方式の採用がうなずけるであろう。

さて王舎城結集で、この無資格者阿難は殆んど主役をになわされた恰好になったのである。

十五

釈尊涅槃時における過失を指弾されたのもこの王舎城結集でだった。この非難に対して阿難はきわめて「人間的な」答え方をしている。

遺体を涙で濡らしたことについても「彼女たちの純粋な悲しみを思うと不愍でならず、たつぷりお別れさせたのです。それが大罪で

したら、私はどんな罪でも受けましょう」と真情を吐露する。

また釈尊の叔母マハーパジャーバティの入信にも「彼女は幼い釈尊を育てた大恩のある人です。生前の釈尊に伺って出家の許しを得ています。いささかも不都合なことはないはずです」と女人往生の主張に確信をこめている。

会議をもつれさせたのが阿難のこんな発言だった。

「釈尊が入滅間近のとき、私にお告げになりました。比丘がもしも軽微な戒を廃したいと願うなら廃してもよろしい」——「涅槃經」では「小小学処（戒）を廃せよ」となる。

すぐに議員たちは問いかえした。

「その軽微な戒とは何を指しているのか」

「私は知りません。また釈尊におたずねもしませんでした」

議場内は紛糾した。めいみいがあれではないか、これではないか、と僧伽内の戒律につ

いて論じ合った。

議長の迦葉尊者がこれを收拾した。

釈尊滅後なお日は浅い。われわれ遺弟は釈尊が定められたすべての律法を守ってゆくのが義務であろう。どんな小さな戒でも守り抜こうではないか。

議場内はそれでおさまったが、場外で待機していた千人をこえる比丘たちの前へ阿難は引っぱり出された。この千人は殆んどが自由派の比丘たちだった。彼らはかねてから教団の戒律による締めつけに反感を寄せていた。

「釈尊がそんな重大な発言をなされたのに阿難よ。あなたはなぜ廃棄すべき戒を具体的にたずねようとはしなかったのか」

阿難は虚心坦懐に答える。

「私が釈尊におたずねしなかったのは、ついうっかりしていたからです」

「うっかりはひどいではないか」

「廃棄してもよい、とおっしゃったのは釈尊のお心の広さを示すもので、さしずめ廃棄す

べき戒などないのではありませんか。私の不明を詫びよと言うのなら、あやまりますよ」「ここではっきりと詫びなさい」

比丘たちの強請に阿難は頭を下げた。これが尾ヒレをつけて教団内に言いふらされた。釈尊は阿難に細微戒は捨ててもかまわない、とおっしゃった。これが定説となつてしまつた。

こうした過失や逸脱でもわかるように阿難のナイーブな人間性が暗さを除去している。この美点をいち早く気づき、だいじに育てようとしたのが釈尊ご自身ではなかつたであらうか。

釈尊が五十五歳、祇園精舎におられたとき専任の「侍者」を求めた。自薦他薦の多いなかでとくに阿難が選ばれたのは、彼が仲間の比丘に語った「もしも自分が侍者になれたら、こんなふうになりたい」という希望条件を釈尊が聞きこまれたからである。

その条件とは、釈尊が私に法衣や布施物を

分けたりなさらず、また香室中に一緒に住もうなどとおっしゃらず、招かれた場所へ私を同伴せず、逆に私が招待された処へは来て下さり、来客に面接するとき私を同席させず、逆に私の来客には会って下さり、私の身辺に難問が発生したときは相談に乗って頂けて、また私が不在の場所で説法なされた内容を帰ってから私に話して下さるなら……ということだった。

かなり虫のいい希望条件だが、釈尊はこの奔放純心、それでいて求道には燃えた阿難の姿勢が気に入ったようである。このねらいはびつたりで、八十歳で入滅されるまで二十五年間、阿難は常仕し続けたのである。

さてタバス尊者は「阿難系の經典」と言つた。たしかに仏典のなかには阿難を「対告者」とする経文が多い。「仏告阿難」で経文が始まる。だが、阿難自身の独白や論叢で現存するものは稀少である。わずかに断片が拾えるだけだ。

その一つ「長老偈」(テラガター)は晩年の阿難の風懷を紹介している。常仕の仏弟子らしく釈尊の追想が大半をしめる。それも人間性をにじみ出させていて興味深い。

——聡明な人は、二枚舌を使う者、怒りを発し易い者、ケチな人、そして他人の破滅を悦ぶ者と交際してはならない。悪人と交わるのは禍いである。

——見よ！ 粉飾された姿態を。あれは傷だらけで、さまざまなものが寄り集っただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安定していない。

——学識あり、見事に談論し、釈尊の侍者である阿難は、いま重荷をおろし、束縛を離れ、臥床に横たわっている。

——彼は煩惱の汚がれを滅ぼし、束縛を離れ、執着をこえ、よく心の安らぎを得て、生死の彼岸に達し、最後の身体を保っている。

——太陽の裔(すこ)である釈尊の説いたもろもろの教えの基礎となるかの安らぎの路上

に、いま阿難は立っている。

——私は釈尊から八万二千の教えを受けた。また修行者たちから二千の教えを受けた。

——昔の人々はすでに去り、新しい人々は私となじまない。今日、私はただ独り思いにふける。雨のために巣ごもりする鳥のように。

——二十五年間、私は慈愛にあふれた言葉の行いによって尊き師のおそばに仕えた。影が身体から離れないように。

——あらゆるすぐれた覚者(釈尊)が、まだらかな安らぎ(涅槃)に入られたとき、恐怖があった。そのとき、身の毛のよだつことがあった。

身の毛がよだつこと、とは覚者を喪ったという悲しみのことであろうか。それとも特定の事件なのだろうか。

(つづく)

『好評』

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁 定価 三五〇〇円 (千二百五〇円)

〔普及版〕B 6判二三五頁 定価二八〇〇円

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

△発売▽

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四
振替 東京〇―一九〇〇

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 十一月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年十月二十五日 印刷
昭和五十九年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒113 振替東京八―八二―八七番

(新)

(刊)

『浄土宗のおつとめ——日常勤行式——』

著者

大正大学教授・文博

真野龍海

B 6判 一〇〇頁 定価六五〇円 (千二百五〇円)

〔五十部以上二割引定価五二〇円 千無料〕

◎平易にかつ丁寧な解説がほどこされた日常勤行式のお話。日々の信仰生活のおつとめに、全二十三節からなるやさしい解説文がお役に立ちます。著者の真摯な人生論としても、また広くおすすめしたい好著です。

(発売) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会

電話 (〇三) 二六二―五九四四

振替 (東京) 八一八二―一八七

第五十卷

十一月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年十月二十五日印刷 昭和五十九年十一月一日発行